

のですが、表出＝表現のされかたとしていうなら、「読むための詩」といっていいでしょう。

「少年詩」が、新体詩人たちによる余技として創られる。その「新体詩」のジュニア版が意識的に創作されるようになったのは、当時における子ども向けの雑誌——「少年」（時事新報社）、「少女の友」（実業之日本社）等で、年代的に言えば、明治中期以降、明治三〇（一八九七）年の島崎藤村による『若菜集』以後ということになります。

簡単にその生誕の歴史を辿ると、明治三六（一九〇三）年、岩野泡鳴によって「少年」（時事新報社）に掲載された、少年対象の詩と、子守唄が少年詩の事始めではないかとされています。ひとこととていうと、口語散文詩とでもいっていい詩型です。そして、新体詩風の子どもの向けの詩が定着したのは、「日本少年」（実業之日本社、明治三九（一九〇六年一月））を舞台にした有本芳水の活躍によって、というのがいまのところでの定説です。

しかし、当時においてはまだ「少年詩」という呼称は生まれでておらず、明治期を経て、大正三（一九一四）年一月、大日本雄弁会講談社から発刊された「少年倶楽部」において、「少年新詩」「少年長詩」「新詩」などとまちなちで、「少年詩」という呼び名が顕われてたのは、同誌の第七卷第一号（一九二〇〔大正九〕年八月）西条八十の「夏の雨」に冠せられたのが初めて。それ以降、意識的・

無意識的に詩の内容のいかんを問わず、子ども対象の詩が総じて現在用いられている「少年詩」と呼び慣わされることになったのです。大正一一（一九二二）年一月には、「少年倶楽部」と対の「少女倶楽部」においては「少女詩」という呼称もでていて、西条八十がその中心的な役割りを占めるのですが、現在に至る全体の流れとしては、「少年詩」がその総称に当てられているのです。「幼年詩」という類別の仕方もありますが、それはグレードを示す呼称の仕方——ですから「ヤングアダルト詩」との対比で言えば、「少年詩」とは、「少女」または「幼児」をも含んでの「中学生」までの、いわゆる「子ども」に向けての詩、ということになります。

あと「唱歌」との区分けについて——それは、明治五（一八七二）年、学制がしかれたそのなかでの「唱歌科」の歌曲としてであって、『小学唱歌集 初篇』をその嚆矢としています。いわゆる西洋音楽の日本版としてであって、「文部省唱歌」といえばそれがいちばんびったりしています。「童謡」とも「少年詩」とも別系列の、歌唱のための詞（詩）、ということになるのです。

3 児童文学としての「少年詩」の存在意義は？

冒頭でもいいましたように、「詩」はいつに、意識をも論理をも、また言語そのものをも通り越した、言語による